1968 年の司教聖別式：

それはやはり無効である

アンスガール・サントグロッスィ修道士（Br. Ansgar Santogrossi）、ピエール・マリー・ドゥ・ケルゴルレ神父（Fr. Pierre-Marie de Kergorlay）及びアルヴァーロ・カルデロン神父（Alvaro Calderon）からの異議に対する回答

—アンソニー・チェカダ神父（Rev. Anthony Cekada）—

2006 年 3 月、私は 1968 年にパウロ六世によって公布された新しい司教聖別の有効性を調査する 14,000 語の研究論文、『確実かつ完全に無効である（Absolutely Null and Utterly Void）』[1] を発表しました。この論説の見出しからはっきりお分かりの通り、私はこの新しい儀式が無効であると結論を下しました。

幾つかの事柄がこの論説を書くに至らしめたのです：つまり相当数の“認可された”ラテン語の聖伝ミサは、今や諸教区あるいは聖ペトロ会（Fraternity of St. Peter）や王たるキリストの修道会（the Institute of Christ the King）の様な諸団体の下で捧げられている事、さらにこれらの教区や団体に関係する司祭たちの叙階（ordinations）が、新しい儀式により聖別された司教たちにまで遡るという事です。ですからもしこれらの司教たちが真の司教でないとすれば、彼らが叙階した司祭たちは司祭ではありませんし、彼らのミサに与る信徒たちは、単にパンを拝領する事になるのです。

それに加えて、2005 年 4 月にあったベネディクト十六世の教皇選出以来、聖ピオ十世会（SSPX)は自会の公会議教会への統合に向けてバチカンとの交渉をして来ました＜これからも継続する＞。多くの聖伝主義者たちは第二バチカン後の秘蹟儀式（sacramental rites）の有効性を疑っている事、そして確かにベネディクト十六世が例の新しい儀式により司教に聖別されている事から、SSPX の長上たちは、新しい司教聖別式が有効であるという事を論証する

アンソニー・チェカダ神父は至聖三位一体（Most Holy Trinity）神学校に於いて秘蹟倫理神学（sacramental moral theology）、教会法、及び典礼学を教えている。彼は1977年にルフェーブル大司教により叙階され、聖伝主義問題（traditionalist case）を提起する数多くの論説と研究論文を執筆した。彼は自身がラテン語の聖伝ミサを捧げるコシンシナティー近郊に住んでいる。

[1]：www.traditionalmass.org. インターネットのの手段がない方々は、大聖ジェルとルード教会（St. Gertrude the Great Church）、4900 Rialto Road, West Chester OH 45069, 513.645.4212.と連絡を取る事により当論説の無料コピーを入手する事が可能です。

為に、ドミニコ会聖職者のピエール・マリー・ドゥ・ケルゴルレ神父を自分たちの軌道へと（in their orbit）招いたのです＜ここは注意すべき点である。この司祭の論説が、以後 SSPX によって、至る所で、公会議教会をカトリック教会と同一視させ、公教会と教皇の不可謬性に幾つかの例外を設ける目的で用いられているからである。これは恣意的思考誘導と言える代物であり、真実を葬り去る為の道具に用いられるだろう - 和訳者＞。

ピエール・マリー神父の研究論文は、先ず 2005 年秋に、ドミニコ会の季刊誌である*セル・ドゥ・ラ・テール誌*（*Sel de la Terre*：地の塩）に掲載されました。SSPX は早急にそれを翻訳させると、SSPX の英語出版物である、*アンジェルス誌*（*The Angelus*）に、『新しい司教聖別は何故有効なのか（Why the New Rite of Episcopal Consecration is Valid）』[2]という見出しで印刷させています。

私自身の論説は、ピエール・マリー神父の主要な論拠に焦点を当てました。すると今度は、新しい司教聖別式の無効性を論証する大量の文書を出版して来たヨーロッパの聖伝主義者たちのグループ、*ローレ・サンクティフィカ（Rore Sanctifica）*[3]の奮闘のお陰によって、それがフランス語に翻訳され、フランスに於いて広範囲に行き渡ったのです。

その後、私は大衆的普及を意図した（その上フランスで翻訳及び配布されもした）『新しい司教たちはどうして真の司教ではないのか』[4] という題名の概要を二ページで示しました。それから私は、（どういういうわけか）この主題についてフランスのラジオ放送で二つのインタビューを行うと、2006 年 7 月の総会に参加予定だったフランス語圏の SSPX のメンバーたちに宛てて、この論説のコピーを個人的に送付しました。

この論説を酷評する幾つかの回答が現れました。しかしながら、この文書（2006 年 12 月）に関して同様に、ただ三名の執筆家だけが、対処の必要ありと私が考える本質的論争点を提起したのです：

●聖ベネディクト修道会、*アンスガール・サントグレッスィ* 修道士。オレゴンにあるエンジェル大修道院（Angel Abbey）のベネディク会士であり、（パリの）カトリック大学（Institute Catholique）の卒業生であるアンスガール修道士は、メキシコはクエルナヴァカ（Cuernavaca）の教区神学校で哲学と神学を教えている。彼の論評は、先ず最初に、フランスのインダルトグループに現在は奉仕する SSPX の元メンバー、ギィヨーム・ドゥ・タヌアール（Rev. Guillaume de Tanöarn）神父によって編集されたフランス語出版物である *Objections*

---

[2]：2005 年 12 月–2006 年 1 月。

[3]：www.rore-sanctifica.org. このグループの名称は、恐らく 1947 年のピオ十二世により規定された司教聖別の為の秘蹟形相から取った言い回しである、“露を以って聖化し給え”を意味するラテン語です。ピエール・マリー神父の論説はローレが新しい司教聖別式の無効性について発表した最初の関係書類への回答として書かれました。

[4]：*大聖ジェルトルード会報（St. Gertrude the Great Newsletter）*、2006 年 10 月号；さらに www.traditionalmass.org. も御覧下さい。

＜*異議*＞[5] に掲載されました。その後、別版が米国の聖伝出版社*ザ・レムナント(The Remnant)*[6] から発売されています。

●*ピエール・マリー・神父*。ピエール・マリー神父自身の回答は、*セル・ドゥ・ラ・テール誌* 上[7]に印刷され、短い“通達（Notes)”という形で姿を現しました。後になり、それは（他に二つの短い通達と一緒に）彼の最初の論説の再印刷に付け加えられています。[8]

●アルヴァーロ・カルデロン神父。カルデロン神父はアルゼンチンにある SSPX の神学校で神学を教えています。彼の回答は*セル・ドゥ・ラ・テール誌*[9]に、それから次に*アンジェルス誌*[10] にも掲載されました。

新しい司教聖別式の有効性に関する議論は、**聖別式の本質的な秘蹟形相／聖別式に欠かせない秘蹟形相（its essential form）**－つまり秘蹟儀式の中で秘蹟の効果を生じさせるのに必要かつ十分な言葉－に集中します。

アンスガール修道士、ピエール・マリー神父、そしてカルデロン神父たちによる異議へと向かう前に、私は私独自の論拠の中にある幾つかのキーポイントを概説するつもりです。

Ⅰ．私の論拠の要約

A. 有効性に関する諸原理。

神学に於ける他の多くの領域とは違い、倫理神学が秘蹟形相（sacramental forms）の有効性を決定する為に適用する諸原理は非常に単純であり、理解するのは非常に容易です。ここに私たちにとって重要なものがあります：

（1）各秘蹟儀式の中には、秘蹟の効果をもたらす本質的な秘蹟形相（an essential sacramental form）があります。**本質的な意味の変更**が、言葉の本質的な改悪（corruption）又は省略（omission）を通じて本質的な秘蹟形相に導入される場合に、**この秘蹟は無効となります**（＝秘蹟の効果を“生じさせ”ない、あるいはもたらさない)。

(2) カトリック教会の東方典礼でその使用が認められている諸秘蹟形相は、言い回しの点でラテン典礼の形相と時々異なっています。そうではあっても、それらは*本質的に*（in *substance*）同じものであり有効

5：『新しい司教聖別式の有効性に関するチェカダ神父への回答（Réponse à l'abbé Cekada sur la validité du nouveau rite d'ordination épiscopale）』、*異論* 6（*Objections* 6）（2006年6月)、36－41。

6：『新しい叙階式の無効性に関するセデヴァカンティスト的‘証拠’の論駁（A Refutation of the Sedevacantist 'Proof' of the Invalidity of the New Ordination Rites ）』、レムナント出版、2006 年 9 月 15 日、11－12。

7：57（2006 年夏号)。

8：*彼らは司教なのか？新しい司教聖別式は有効なのか？（Sont-ils êveques? Le nouveau rituel de consécration épiscopale est-il valide?)* フランス、アヴリエ：2006 年*セル*出版の改訂版、75－6。

9：『司教聖別儀式の有効性（La Validité du rite de consécration épiscopal)』、58（2006 年秋号）213－6。

10：『司教聖別式の有効性（The Validity of the Rite of Episcopal Consecration)：異論への回答』、*アンジェルス誌*（2006 年 11 月号)、42－4。

なのです。

（3）1947 年にピオ十二世は、諸品級（Holy Orders）の為の（即ち、助祭職、司祭職、さらに司教職の為の）形相は、秘蹟の効果 - つまり品級の権能（the power of Order）と聖霊の恩寵（the grace of the Holy Ghost）- を明瞭（＝明解に）に表現しなければならないと言明しました。

（4）司教職を授ける＜司教聖別の＞為に、ピオ十二世は（a）司教が授かる**品級の権能**と（b）**聖霊の恩寵**を明瞭に表現する、聖伝の司教聖別儀式内の一文を本質的な秘蹟形相に指定したのです。

B. 新しい司教聖別儀式への＜（1）～（4）の＞適用

1968 年、パウロ六世は司教聖別の序唱（the consecratory Preface）と、ピオ十二世により指定された本質的な秘蹟形相の両方をそっくりそのまま取り替えてしまいました。新しい序唱（現在では“聖別の祈り[consecratory prayer]”と呼ばれている）に於いて、パウロ六世は次の言葉を本質的な秘蹟形相に指定し[11]、有効性の為にそれを要求しました。

『ですから今、この選ばれし者に、貴方からのものである力、貴方が御自分の最愛の御子イエズス・キリストにお与えになられた**統治する霊**（the **governing Spirit**）、即ち、その御子によって、貴方の御名の絶え間なき栄光と賛美を捧げる神殿となるべき教会を至る所で築かれた聖なる使徒たちに与えられた霊を注いで下さい＜試訳＞。』

ところで私は、『確実かつ完全に無効である』の中で、分かり易い五つの質問を提起し、かつそれに回答する事で、セクション A の諸原理を前述したもの＜セクション B 序文＞に適用しました。ここで私はアンスガール修道士、ピエール・マリー神父、さらにカルデロン神父からの回答の中で最もあからさまに姿を表わす二つのものに言及します。

1. 東方典礼？*カトリックの東方典礼に於いて秘蹟形相として用いられる新しい形相は、司教職を授ける為のものか？*

ピエール・マリー神父が自身の論説の至る所で *繰り返し* - 私は少なくとも十二回それを数えました - パウロ六世による形相の有効性に関する確実な証拠を東方典礼の祈りに求めているので、私はこの質問を提起しました。

それから特にコプト（Coptic）派及びマロン（Maronite）派典礼に言及しながら、ピエール・マリー神父はこう書いたのです：『確実に有効な二つの東方典礼にある形相の使用は、その＜新しい司教聖別の＞有効性を保証する。』[12]

この主張を論駁する事は比較的容易い事でした。私がしなければならなかった事と

---

[11]：*Pontificalis Romani Recognitio*、1968年6月18日、AAS 60 （Act of Apostolic See 60 - 使徒座公文書60番＝*フマネ・ヴィテ*）、372、373：『*declarare quaenam in ritu ad naturam rei pertinere dicenda sunt,*』『*quorum haec ad naturam rei pertinent, atque adeo ut actus valeat exiguntur.*』

[12]：『新しい司教聖別は何故有効なのか』（2005 年 1 月）。

は、ただ東方典礼にある諸秘蹟の形相を確認し（例えば、カッペッロ［Cappello］著、*de Sacramentis［秘蹟について］*やデンツィンガー著、*Ritus Orientalium［東方典礼］*の第一巻など）、これらの著者たちが、コプト派及びマロン派典礼に於ける司教聖別用の形相として挙げている文言を調べ、それらの文言をパウロ六世の形相と比較するという調査的な仕事だけだったのです。

以下が私の発見したものです：

（a）**長さ。**　コプト派及びマロン派の＜秘蹟＞形相は、長い序唱から成り立っていますが（それぞれ凡そ 340 と 370 語）、ローマ典礼とは違い、どちらの序章にも、本質的な秘蹟形相に指定された一文がありません。

パウロ六世による新しい司教聖別の祈り＜序唱＞は、全部で 212 語の長さであり、パウロ六世が本質的な秘蹟形相に指定した一節は 42 語の長さとなっています。

ですから、単に上述した東方典礼の *長さ* をパウロ六世の文言と比較する事は、一見しただけでも、ピエール・マリー神父の主張が間違っている事を証明しました。

（b）**コプト派の形相。**パウロ六世による聖別の祈りは、コプト派の形相に見出される多くの表現を含んでいます。しかしながら、それは 司教位階のみに固有 であると見做される三つの具体的な秘蹟的効力（three specific sacramental powers）を列挙しているコプト派の形相にある三つの表現：『*彼＜聖主＞の命令に従い* 司祭職に聖職者を提供し．．．祈りの新しい家を築き、さらに祭壇を聖別する＜試訳＞』[13] を除外しているのです。

この除外は重大です、何故ならパウロ六世による本質的な秘蹟形相の有効性に関する議論は、果たしてそれは、授けられているこの＜司教＞位階の権能 - 即ち、司教職 - が適切に表現されているかどうかを中心に展開するからです。

（c）**マロン派の形相。**パウロ六世による司教聖別の祈りは、デンツィンガーがマロン派による聖別用の形相として挙げている祈りと何一つ共通点がありません。[14] それはマロン派の形相を *真似ている* - 但しその一部ではない - 祈りと共通した表現を幾らか含んでいます。[15]

しかしながら、パウロ六世による聖別の祈りは、別に存在するマロン派の祈り - つまりマロン派総主教の聖別儀式に見られるもの - にかなりの程度似ているのです。[16]　なるほど、ピエール・マリー神父は、新しい儀式＜司教聖別＞の有効性を擁護する論拠を支持する為に、この文言の多くを模写したのです。

13：　Translation in O.H.E. KHS-Burmester（Oswald Hugh Ewart KHD-Burmester）、 *Ordination Rites of the Coptic Church* (Cairo: 1985),　p. 110–1.

14：H.　デンツィンガー、*コプト派、シリア派、アルメニア派の東方典礼*（Würzburg: Stahel 1863 年）、以後『RO：*Ritus Orientalium, Coptorum, Syrorum et Armenorum* 』、は RO の本文 1：141 を識別する。本文それ自体としては RO2:23-24 を御覧下さい。脚注内の見出しによれば、聖別を行なう司教は、助祭長（Archdeacon）の感嘆詞（interjection）に続く部分の間、自身の手を押し付けた＜按手した＞ままにし続ける。

15：RO2:198。『supiritum . . . Sanctum, illum, illum principalem.』、『expellat omnia ligamina.』。

16：RO 2:220。

しかしながら、この祈りは*司教職を授ける為の秘蹟形相ではありません*。それは単に据え付けの祈りなのです、何故ならマロン派総主教というものは、任命を受ける時点で *既に* 司教であるからです。

（d）**概略。**ピエール・マリー神父による主な主張と結論 - 『確実に有効な二つの東方典礼にある形相の使用は、その＜新しい司教聖別の＞有効性を保証する。』 - を論駁した後、私は次に倫理神学が秘蹟形相の有効性を確認する為に応用する他の諸原理を用いて、新しい儀式＜新しい司教聖別＞を調査しました。

2. 秘蹟の効果（The Sacrament Effects）。
新しい秘蹟形相は秘蹟の効果 - 品級（司教職）の権能と聖霊の恩寵 - を明瞭に表現しているか？

言及した二要素は、ピオ十二世により指定されているものであって（上記、I.A.3 を御覧下さい）、この形相は *その両方* を表現しなければなりません。

今や、議論は新しい必須の秘蹟形相内にある*統治する霊*（ラテン語の *Spiritus principalis*、あるいはギリシャ語の同義語である *hegemonicon pneuma* ）の意味を中心としています。ではそれは何を表現しているのでしょうか？

（a）**聖霊は？**文脈から判断すると、*統治する霊（governing Spirit）*は、単に、聖霊だけを表わしているようです。*Spiritum* は聖三位一体の第三の位格（Third Person）を仄めかしており、ラテン語原文内では大文字で書かれていて、その関係代名詞は（秘蹟形相内で＜*Spiritum*＞に先行するもう一語、*virtus*、即ち、権能を表わすだろう）*quam* ＜女性形＞ の代わりに、（ここでは“whom : ～を”、つまり“聖霊を”を意味する）*quem* ＜男性形＞が使われています。

しかしながら、聖霊の恩寵は要求される二つの要素の一つ でしかありません。

（b）**品級の権能は？** さらに有効である為には、必須の形相は、明瞭に（不明瞭なところなく）品級の権能（*potestas Ordinis*）- つまりこの場合、司教職 - を表現しなければならないのです。

形相内で唯一これを表現し得る言葉は、同様に*統治する霊（governing Spirit）*となります。これは聖別に於いて司教に与えられる品級の権能を明瞭に表現しているのでしょうか？

- ●ラテン語及びギリシャ語辞書は、形容詞の *支配する（governing）*を、それぞれ、“初めから存在する（Originally existing）、基本的な（basic）、元来の（primary）. . . 重要性又は名声に於いて第一の（first in importance or esteem）、主要な（chief）、適当な主演男優又は王子（befitting leading men or princes）、”[17] そして“指導者のような（of a leader）、指導する（leading）、統治する（governing）”あるいは“指

---

[17]：P. Glare、 オックスフォード・ラテン語辞書（オックスフォード、Clarendon 1994 年）。同様に：A. Forcellini、*Lexicon Totius Latinitatis*（パドゥア：1940 年）；A. Souter、*Glossary of Later Latin to 600 AD*（Oxford: Clarendon 1949 年）；C Lewis ＆C. Short, *A New Latin Dictionary*（ニューヨーク：1970 年）。

針となる（guiding）”[18]と表現しています。

- 同類の名詞で *hegemonia* がありますが、一般的にそれは“権威、命令”を意味し、二次的な意味では“統治、長上：司教 . . . 女子修道院長上 . . . の任務 . . . 従って司教の統治領域、及び司教区の任務。”[19]を表しています。
  しかしこの意味に於いてですら、それは品級の権能（potestas Ordinis、即ち、“秘蹟的”権能）を意味しておらず、単に裁治権、それも特に、一つの定義以降は、修道院の長上に言及しているのです。
- 私が他の典拠について簡潔な調査を始めますと、*governing Spirit* ＜*統治する霊*＞ に相応しいと考えられる意味を多数発見しました：初めから存在する霊（originally exsisting spirit）、指導する／指針となる霊（leading/guiding spirit）、ダビデ王の如き完全な霊、寛大又は高貴な霊、御父なる天主、聖霊なる天主、対外的な神的＜天主の＞効果（external divine effect）、廉直／自制の超自然霊、善良な傾向（good disposition）、コプト派大修道院長に所有される性質（親切、愛、忍耐、慈悲深さ）、コプト派大主教に固有の諸徳（教会を通して受けた神的知識）。
- その上、*統治する霊* という言葉は *明瞭* ではなく、ピオ十二世が要求したものとは違い、単に 一つの 事柄だけを表現する言葉なのです。いやむしろ、それは - *多くの異なる事柄*、*性質*、*さらに人物* を表現する可能性があり - *曖昧な* ものなのです。
- さらに、上述した意味の中に、私たちは品級の権能（*potestas Ordinis*）を見出しません。*統治する霊* という表現は、*どの* 意味に於いても、まして司教の品級（the Episcopal Order）を構成する司祭職の充満（the fullness of the priesthood）という意味に於ける、諸品級の秘蹟（the Sacrament of Holy Orders）を曖昧にすらも意味しないのです。

（c）**それはどちらなのか？**　ですから、品級を授ける為の秘蹟形相は、確かに秘蹟の二つの 効果を表現していると考えられはしても、*統治する霊* は - 新しい＜司教聖別＞儀式内の文脈からして - 単に一つだけ、つまり恐らく聖霊だけを意味します。

しかし *統治する霊* はもう一つの効果である、品級の権能を *曖昧に* さえも意味しないのです。

しかしながら、もし誰かが *統治する霊* はこれ＜品級の権能＞を意味していないと主張する事となれば、その時、もう一つの要求される要素である、聖霊はこの形相に不在となってしまうことでしょう＜この様な主張が生じる事自体、ピオ十二世が秘蹟形相に要求した明瞭な表現の不在を証明している＞。

いずれにせよ、結論は同じです。つまりこの形相はそれが意味すると考えられる事

---

[18]：ジェフリー・ランプ（G. Lampe）、*A Patristic Greek Lexicon*（オックスフォード：Clarendon 2000 年）。F. Gingrich ＆F. Danker、*A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*（シカゴ：University Press 1957 年）。

[19]：ランプ、p.599。

柄＜聖霊の恩寵と品級の権能＞の一つを意味していないのです。

（d）結論。前述の *統治する霊* に関する分析は、次の結論に私を至らせました：

- 要求される要素の一つが存在しない事から、パウロ六世の形相は、司教職という品級を授ける為に必須の秘蹟形相内に本質的変更を構成した。
- 明確に述べられた一般原理（I.A.1）に拠れば、必須の秘蹟形相に於ける本質的変更は、秘蹟を無効にしてしまう。
- パウロ六世によって公布された必須の秘蹟形相を用いて授けられる司教聖別は無効である。

私の主要な論拠と結論はこのようなものです。今から例の異論＜論駁＞に私たちは取り掛かります。

Ⅱ．アンスガール・サントグロッスィ修道士　聖ベネディクト修道会

アンスガール修道士が私の論拠に関する簡潔な要約を読者に提供し、自分は“チェカダ神父に軽視されている問題点の幾つかの側面をややショットガン風に”まとめるつもりだと言っています。またこの後で、“チェカダ神父の基本的な間違い - とパウロ六世による司教聖別式文の有効性 - が明白になるでしょう”[20]とも言っています。

アンスガール修道士の論拠は二つの部分から成り立っています：先ず、彼は品級の授与に必須の形相が、授与される品級の権能を *明瞭に* 表現しなければならないという一般原理（上記Ｉ.A.3 を御覧下さい）を無効にしようと試みます。

次に、有効性の基準を“暗黙の意味の領域（a field of implicit significations）”[21]と自身が呼ぶものに変える事で、アンスガール修道士は、新しい司教聖別儀式内の *統治する霊* が、“暗黙の内にではありますが、*実際* かつ *明白に* 司教の品級の権能を意味しています”[22]と主張しているのです。

A.ピオ十二世による“曖昧な”儀式文

アンスガール修道士は、ピオ十二世により - そうです、ピオ十二世によってです - *Sacramentum Ordinis* の中で規定された必須の秘蹟形相は曖昧なものであり、私がパウロ六世の秘蹟形相に適用している基準に基づいてそれは無効だったと証明しようと試みます。

1.　トレント　最初の出し物として、アンスガール修道士は、*統治する霊* - ラテン語では *Spiritus principalis* - としての司教職を支持してもらう為にトレント公会議に協力を求めようと試みています＜つまりトレント公会議の教令を引用して、「*統治する*

---

[20]：“論駁（Refutation）”、11。

[21]：この理論は、どうやら：“もし我々がそれを作るなら、それらは生じるだろう ...＜我々がそういうものだと考えたいならば、そういうものになるだろう＞ ”というものらしい。

[22]：“論駁”、12。

霊」イコール「司教職」である事を証明しようと試みているの意＞。

“トレント公会議が司教たちについて教えている最初の事柄（品級の秘蹟に関する教令、第 4 章）とは”、アンスガール修道士は言います、“彼らが *主として*、公教会を統治する為、聖霊によって確立された、位階制のメンバーであるという事です。”[23]

この事から、この教令に向きを変え、*Spiritus principalis* にあるものと同様の、ラテン語の言葉 *principalis* を見つけようと当然のことながら思うでしょう。

しかし見つかりはしません、アンスガール修道士はある英訳を用いました；彼の翻訳は“主として（principally）”と言っている一方で、ラテン語原文は *praecipue* という言葉 - それが持つ幾つかの意味[24]に於いて *principalis* とよく似ています - を用いていますが、我々が今論じている言葉では*ありません*。

さらにまた、当教令が司教たちについて教えている“最初の事柄”とは、*統治する* 為に聖霊によって彼らが確立されたという事でもないのです。当教令は第一章に於いて、彼らが *諸秘蹟* を授ける権能を持つ *司祭職* に於ける使徒たちの後継者であると教える事から始まっています。[25]

2.　助祭職（Diaconate）。“ministry”という言葉は、アンスガール修道士は主張します、ピオ十二世による儀式文の中で助祭職と司教職の両方に用いられています。どういうわけで、アンスガール修道士が尋ねます、チェカダ神父には、司教聖別の儀式文は“司教を作るが、助祭長（archdeacon）は作らない”と分るのでしょうか？

それは、ピオ十二世の為に *Sacramentum Ordinis* を執筆した神学者たちの一人でありますイエズス会のフランシス・ヒュルツ<?>（Francis Hürth）神父が、助祭叙階（diaconal ordination）の形相内にある“ministry”が意味するものを *正確に* 説明してくれたからこそ、チェカダ神父にはそれが分かるのです：

“誰一人、この文内にある‘ministry’という言葉が、この品級全体の名称である‘助祭職（diaconate）’の由来となっているギリシャ語の *diaconia*（‘*diaconii*’）と一致する正式かつ専門的な意味で使われている事を疑う事が出来ない。”[26]　＜つまり助祭叙階の形相内にある ministry＝deaconate（助祭職）である＞

3.　司祭職。聖伝の司祭叙階用の儀式文に方向転換し、アンスガール修道士はこう主張しています：“叙階に必須な形相内にあって、派生語に *presbyteratus* が見出される、ギリシャ語の‘presbyter’は、‘elder＜長老＞’を意味しますが、‘犠牲＜いけにえ＞を捧げる者（*sacerdos*）’を意味しません。”これもまた、チェカダ神父の基準に拠れば、

---

[23]：“論駁”、11。

[24]：例、特殊なケース特有の方法で、特に、他のどんな場合よりも、他の場合より大きめに。

[25]：De Sacramento Ordinis 1、デンツィンガー 957：”atque apostolic eorumque successoribus in sacerdotio potestatem traditam consecrandi, offerendi et ministrandi corpus et sanguine ejus, necnon et peccata dimmitendi et retinendi.”

[26]：フランシス・ヒュルツ神父、“Commentarius ad Cons. Apostolicam *Sacramentum Ordinis*,”Periodica 37（1948）、26。

曖昧なものとなってしまうでしょう。[27]

これには二つの問題があります：

（a）ギリシャ語の起源が不適切である。この秘蹟形相は教会のラテン語（ecclesiastical Latin）に属しており、そこにあって *presbyter* という言葉は、専ら司教の品級より下にある司祭の品級を有する者を表しているのです。

（b）その上、アンスガール修道士はピオ十二世の形相内にある *もう一つの* 表現 - つまりヒュルツ神父の言う、受け取られる品級を明瞭に（明解に）表現しているものを見落としています：

“これらの言葉により、司祭の品級の権能が、それに対応する聖霊の恩寵と共に、明瞭に［*univoce*］表現される。何故なら、名指しで授与されているのは、（司教職である、*第一* 級の任務とは対照的に）‘*第二* 級の任務’たる、司祭の位階（sacerdotal dignity）だからである。”[28]

4.　司教職。そして最後に、ピオ十二世が司教聖別の為に規定した形相に同じ方法を適用しながら、アンスガール修道士は主張しています：“それでもやはり、‘御身の品級の充満（fullness of your ministry）’ それ自体、この品級の充満（ministerial fullness）が、叙階される者が、助祭に叙階される時に一度受けた非司祭の／司祭ではない品級（*non-priestly* ministry）と異なるという事を*明確に* 指摘していません。”[29]

そこでヒュルツ神父は、最終的にピオ十二世が採用した一節を＜司教聖別に＞必須の形相として提案した神学者たちに基づいて、上述した言葉の説明を提供しています：

“権能と恩寵が意味されるのに全く十分な言葉が聖別序唱（consecratory Preface）中に見出されるが、この序唱に必須の言葉とは、司祭の品級（the sacerdotal ministry）の‘充満（fullness）もしくは全体（totality）’と‘*全* 栄光の衣服／栄光 *に満ちた* 衣服＜試訳＞（the raiment of *all* glory）’がそこで表現されるものである。”[30]

その結果、自分独自の書き物が意味するものに対する “恵まれた（privileged）”眼識を著者が少しも持たない奇妙な近代理論の教義に従わない限りは、ピオ十二世による形相内の言葉が、どれ程にかつどうして明瞭で *ある* のかに関するヒュルツ神父の説明は、それらが事実上明瞭では *ない* と主張する、アンスガール神父の“暗黙の意味の領域”理論を挫くのに十分でしょう。

B. “暗黙の、かつ明白な意味”

自らの論説の第二部で、アンスガール修道士は、新しい司教聖別式の中にある *統治する霊* は“暗黙の内にではありますが、*実際* かつ *明白に* 司教が有する品級の権能（the episcopal　power of order）を意味している”[31]事を論証しようと試みています。

これが、前述した事柄についてアンスガール修道士の提供している幾つかの証拠で

---

[27]：“論駁”、11。

[28]：“Commentarius”、20。彼による強調。

[29]：“論駁”12。

[30]：“Commentarius”、30：“‘summa seu totalitas’ ministerii sacerdotalis.”

[31]：“論駁”12。

す：[32]

- “最高品級の霊的で聖霊に由来する特質（a spiritual and Holy Spirit derived character of the first order）、もしくは *principalis（統治する）*特質を受けた者は誰でも、公教会に於ける最も重要な霊の源泉（the principal source of the Spirit）となります。要するに、彼は *episkopos＜司教＞*なのです。”
- *統治する霊* という言葉で十分である。何故ならそれは“司教職（episcopate）特有のもの”だからである。
- 高位聖職者が“‘司教を叙階する事’ - 彼＜アンスガール修道士＞はこの儀式のことを‘司教の叙階（ordination of bishop）’と書いてある本を使用しています - を意図し、［. . .］*spiritum principalem＜統治する霊を＞*という語句を用いているならば、有効性に関する疑いなど決してないはずです。”
- *spiritum principalem* で十分である。何故なら“司教が有する聖化の権能（the Episcopal power of sanctification）は、それが“最も重要なもの（principal）”である事から、別々に意味される必要がありません”。
- “司教とは、‘統治する霊’という使い方をする時の意味から最初に類推されるものです”、何故なら公教会内にある他の職務の全ては、“司教の監督下にある”からである。

回答：

（1）もし貴方が前述した内容を注意深く再読すれば、アンスガール修道士が *統治する霊（governing Spirit ／ Spiritus principlalis）* は司教職を十分意味しているから司教職を十分意味しているのだという同じ循環論法を幾つかの異なった方法で言い直しているに過ぎなかったと気付かれることでしょう。

（2）とりわけ、アンスガール修道士は、“暗黙のうちに” ＜ここでは『司教職を』＞意味している秘蹟形相は、秘蹟を有効に授けるのに十分であるという見解について何一つ典拠を引き合いに出していないのです。

実に、聖伝の秘蹟神学（traditional sacramental theology）はそれと正反対の事を教えています。もし洗礼を授ける者が“私は天主の御名によりて汝を洗う”と言う場合、彼の言葉は聖父、聖子、そして聖霊を 暗に意味しています が、この形相は無効と見做されます。

（3）アンスガール修道士の主張は、“神学問題を研究する” 第二バチカン後の近代主義者の典型的例なのです。彼は言葉を定義しないか、自分の＜思考＞原理を明確に言明しない事から、その言い回しは曖昧で掴みどころがありません。

それでも、*統治する霊* が司教に与えられる品級の権能を明瞭にかつ暗黙の内に意味しているのだという彼の主張は、ただ彼の言葉をその彼の為に定義してあげる事によ

[32]：それは全て“論駁”、12 で見付かります。

り容易に論駁されます。

(a)“明瞭な（Univocal)”は、“たった一つの意味しか持たないもの”を意味します。[33] 私の最初の論説に於いて、*統治する霊* という表現は、一つ だけの意味を持ちませんが、最低に見積もってみても *1 ダース前後* の意味を持つという事を証明しました。従って、それは“明瞭な（unequivocal)”とは見做され得ない表現なのです。

(b)“暗黙の（Implicit)”は、“何か他のものに含まれているもの全て”[34]を意味し、その結果として、もしアンスガール修道士の主張が本当なら、*統治する霊（governing spirit）* の意味の中に、“司教職が有する品級の権能”の類のものを見つけるでしょう。しかし、私が“確実に無効である（Absolutely Null)”の中でも論証しました様に、これ＜品級の権能＞は上述した言葉＜*統治する霊*＞には含まれて *おらず*、そうなると、“暗黙の”と見做される事も出来ません。

(4) 教義神学、倫理神学、そして教会法は、（諸秘蹟を授ける）品級の権能（the power of *Order*）と（統治する）*裁治権* という権能（the power of *jurisdiction*）を別個で全く異なるものだと見做しています。片方が自動的にもう片方を伴う事はありませんし、もう片方を暗に意味するという事もありません。

アンスガール修道士の主張は、司教が受ける秘蹟的権能が何らかの方法で“統治する”権能に含まれていると仄めかす事でこの識別を見えなくしています。

従って、アンスガール修道士が聖伝カトリック神学の識別出来る諸原理（discernible principles）のどれにも基礎を置かない *統治する霊* の弁護を提供出来なかった事は明らかになるはずです。

Ⅲ. ピエール・マリー神父　聖ドミニコ会

“確実に無効である”に対するピエール・マリー神父の異論は、手短な 2 ページに亘っています。一つを除けば、これらのページは新しい聖別式の有効性に反対する私の論拠の内容に焦点を宛てていません。私は彼のさほど重要でない異論に回答する事から始めるつもりです。

A. 皮相的な異論

1. 逐語的な議論　ピエール・マリー神父が当てにしていた文書に関するドン・エマニュエル・ラネ（Dom Emmanuel Lanné）の批評をこの私が誤り伝えたとピエール・マリー神父は主張しています[35]。

---

[33]：Lewis＆Short、*univocus*.

[34]：A. Michel、“明確かつ暗黙の（Explicit et Implicit)”、カトリック神学辞典 5：1868（DTC5：1868）。“Est explicit tout ce qui est admis ou proposé expressément; est implicite tout ce qui est contenu dans autre chose.”

[35]：この文書は RO （*Ritus Orientalium, Coptorum, Syrorum et Armenorum* ）にあるコプト派の司教聖別儀式の為のラテン語訳である。

これ（付録に載せられた引用文）について議論する代わりに、私は同じ文の中で、問題の文書は“注意して扱われるべきである”[36]と *同様に* 警告した *もう一人の* 学者を引用しましたと単に指摘しているだけなのです。

2.　叙階する権能。ピエール・マリー神父は、司教聖別の形相は、それが有効である為に、司祭たちを叙階する権能を明確に言及しなければならないと私が主張しているという印象を残しています。

間違いです。私はそう主張していませんし、自分の論説の何処においてもそう言いませんでした。

3.　諸教会を創立する＝叙階する？　ピエール・マリー神父は、“使徒たちに与えられた諸教会を創立する権能 . . . ”[37]に言及するパウロ六世の形相内にある表現は、必然的に司祭たちを叙階するそれ＜権能＞を仄めかしていると主張しています。

少なくとも次の二つの理由から、間違いです：

（a）使徒たちが諸教会を創立した理由は、彼らがただ単にそうする為の特別な *裁治権*（an extraordinary *jurisdiction*）を享受していたからなのです。[38]　神学者のドルシュ（Dorsch）は、この権能は司教たちに授けられ *ない* とはっきり言っています：“使徒たちに固有な職務の全ては、司教たちにも固有なのではない - 例えば、新しい諸教会を創立する事。”[39]

（b）“諸教会”（現代的専門用語では、諸教区）を創立する事は、*裁治権* と言う権能の行使であり、司祭を叙階する様な、*品級* のそれではないのです。この裁治的権能（jurisdictional power: 諸教区を創立する権能）はローマ教皇だけに固有です。[40]

4.　言葉の数。さらにピエール・マリー神父は、この私が秘蹟形相にある言葉の数を、有効性にとってのある種の尺度と見做していると仄めかしてもいます。

間違いです。私が東方典礼の形相の為の言葉の総数をパウロ六世の形相と比較したのは、ピエール・マリー神父が後者＜パウロ六世の形相＞は“確実に有効な二つの東方典礼儀式に於いて使用されている”からだと主張したからであります。もし言葉の数が全く同じでない場合、彼の主張はどうやって真実であり得るでしょうか？

36：ポール・ブラッドショー（Paul Bradshaw）著、*東西に於ける古代教会の叙階儀式 - Ordination Rites of the Ancient Churches of East and West* -（ニューヨーク、プエブロ - New York Pueblo - 1990 年）、8。

37：*彼らは司教なのか?*　75。“受ける権能は最高品級 - souvrain sacerdoce - のそれであって、それは諸教会を創立する為に使徒たちに与えられた権能（必然的に司祭たちを叙階する権能を仄めかすもの）であるなどと確かに主張されている。

38：J. Abbo&J. Hannon 共著、*神聖な教会法（The Sacred Canons）*第二版、改定版、（St. Louis: Herder 1960）1：354-5。

39：エミル・ドルシュ（A. Dorsch）著、De Ecclesia Christi - キリストの教会 -（Innsbrück: Rauch 1928）、290。

“Non omnes ii actus conveniunt episcopis, qui apostolis, e.g., fundare novas ecclesias etc.”

40：教会法典215.1を参照せよ。“Unius supremae ecclesiasticae potestatis est… dioceses… erigere.”

5. ドン・ボット（Dom Botte）に対して不公平？ ピエール・マリー神父は、この私が新しい聖別式の有効性に影響を与えることなく *統治する霊* の除外が出来るというドン・ベルナール・ボット（Dom Bernard Botte:司教聖別の為の新しい聖別の祈りの作者）の主張を相応しく紹介しなかったと主張しています。

間違いです。私の論説に於ける例の主張に関する議論の論争点とは、*統治する霊* が必須の秘蹟形相内で何を意味しているかという事であります。ドン・ボットが 1969 年にその意味（*以前に*、それについての議論がありました）について簡単に片付けてしまった事は、後年 1974 年にその意味について彼が行なっている擁護と“解説”[41]（*後年*、それに関する議論がありました）が皮相的な嘘八百だったという事なのです。

6. 公教会の非変節性。 ピエール・マリー神父は、私がこの問題を無視していると主張しています。

間違いです。私は論説内のセクション X.B でそれを扱っています。[42]

7. オッタビアーニ（Ottaviani）の承認。 ピエール・マリー神父は、恐らくパウロ六世の＜秘蹟＞形相を承認していると思われるアルフレド・オッタヴィアーニ枢機卿に関する問題をこの私が“避けた”と主張しています。

私は決してそう思いつきませんでした。というのも、1968 年までオッタヴィアーニ枢機卿は *多くの* 事態を改善もせずに放置していたからなのです。

しかし当時のオッタヴィアーニは盲目であって、この枢機卿が署名した[43]少なくとも *一つの* 文書の内容を誤り伝えたのではないかと彼の秘書が疑われ、おまけに後日オッタヴィアーニが典礼上の諸刷新を称賛しにイタリアテレビ（Italian television）に出演した事が重要だとピエール・マリー神父は考えているのですから、(私が思うに) ピエール・マリー神父こそ、この承認を公に否定するでしょう＜盲目／見識の無さ故の承認であるならば、この承認に基づいたパウロ六世の形相の有効性立証はピエール・マリー神父にとって無益となるから＞。

B. マロン派総主教の聖別。

ピエール・マリー神父は私の論拠にある唯一つの本質的な主張だけを論駁しようと試みています。彼は最初の論説の中で、マ

41：B. Bott 著、“'Spiritus Principalis' Formule de l'Ordination Épiscopale," Notitiae 10（1974 年）、410-1。

42：もしもピオ十二世により規定された基準に拠り、新しい＜司教聖別＞儀式が無効であるならば、引き出されるべき結論とは、*公教会が* 変節してしまったという事ではなくて、むしろ *パウロ六世が* 何らかの方法で信仰から離反し、自らの権威を喪失してしまったという事になります。*公教会は* 変節する事が出来ない事を信仰は我々に教えてくれる一方で、*教皇は* 信仰から離反し、自らの権威を喪失する事が確かに出来る事を、教義神学や教会法、さらに少なくとも二名の教皇（イノセント三世及びパウロ四世）による宣言は我々に教えてくれます。引用文として、アンソニー・チェカダ神父著、*聖伝主義者、不可謬性と教皇*（オハイオ州、ウエスト・チェスター市：1995-2006）を参照せよ。

43：彼に秘書モンシニョール・ジルベルト・アグストーニ（Mgr. Gillberto Agustoni）は典礼の近代主義者であり、ブニーニの協力者であった。論説としては、チェカダ神父著、“介入に至るまでの背景（Background to the Intervention）”、*オッタヴィアーニの介入／オッタヴィアーニインターヴェンション*、(Rockford IL: TAN1992)、8-10。

ロン派総主教の聖別の為の祈り＜聖別祈祷＞を新しい＜聖別＞儀式の有効性の証拠として挙げました。私は、これが司教を聖別する *秘蹟の* 祈り（*sacramental* prayer：司教聖別の秘蹟形相となっている祈り）ではなく、単に就任式の祈りに過ぎないと指摘しました。

これに反応したピエール・マリー神父は、次のコメントを伴った初期の“注解”を読者に参照させています:『チェカダ神父はマロン派総主教の叙階（Ordination of the Maronite Patriarch）の祈りの非秘蹟性（non-sacramentality：秘蹟を有効たらしめない＝司教聖別の秘蹟形相として認められない事）を証拠もなく主張しています。私たちの前の‘注解’に於いて、私たちはこの点に関する自分たちの立場を説明致しました。』[44]

注意深い読者は、ここに隠れた僭越（assumption）に注意を払う為に暫し休止するでしょう：＜つまり＞ピエール・マリー神父は、提示Aにある様に、マロン派総主教の聖別の祈りを新しい儀式＜新しい司教聖別式＞の有効性に昇進させているにも拘らず、 *彼は* それが実際に司教聖別を授ける為の秘蹟的な祈り＜つまり秘蹟形相＞であると立証する事を義務付けられていません。それどころか、チェカダ神父及びその他の方々は、それが秘蹟的祈りで *ない* と立証するよう義務付けられているのです。

とにかく、私たちはピエール・マリー神父が次の様に御自分の立場を主張されている先の通達＜本論説第一回を参照あれ＞に戻ります：[45]

- *既に* 司教であった聖職者の中から一人の総主教を選ぶ事は、総主教任命の為であっても、司教を司教座から移動させないようにすべきだと考えられているので、“比較的最近のこと”である。それ以前は、総主教の首都（the patriarchal city）に属する司教で *ない* 聖職者が選ばれた。
- 特別な儀式が作り出された。“自分の首都の司教として . . . 総主教を聖別し、彼をその職務に就ける為に”ある特別な儀式が作り出された。後年になって、既に司教だった聖職者だけが総主教となるべく選ばれるようになると、“この儀式が失われたか、少なくともその聖別能力（consecratory power）が消失した。
- マロン派総主教の聖別の祈りは、司教を聖別する為のもの＜秘蹟形相＞と“事実上同じ”である。主な違いは聖別の祈りの中にある。総主教の場合、司教聖別の為の通常の祈りは“クレメントの祈り（the prayer of Clement）”と取り替えられる。
- この祈りは“今日既に司教である候補者に対して唱えられる場合、もはや聖別の能力を持たない。”

一見して、この主張はもっともらしく聞こえることでしょう。しかし、貴方がその

---

[44]：*彼らは司教なのか？* 75。

[45]：*彼らは司教なのか？* 70-71。

詳細を吟味すれば、それは直ちに崩れ落ちるのです。

1.　漠然とした憶測。前述した主張に於けるそれぞれの事実に基づくつながりは、ぼんやりした一般化に過ぎません。ピエール・マリー神父は私たちに事実に基づく自らの主張に関して *具体的な* 資料 - つまり時代年表、関連する聖職者たちの正体、どの一節が“彼らの聖別能力を失わせた”のか、またこれが起きたと誰が判断したのか、さらに“儀式は失われた”証拠を何処に見つけるかなど - を供給してくれません（また実際には、そうする事が恐らく *出来なかった* のです）。

2.　引用文ゼロ。ピエール・マリー神父は上述した大まかで決定的な主張を立証する為に、少しも典拠 - 神学者、歴史学者、典礼学者など - を引用しません。従って私たちは、彼がこれらの主張を権威にではなく、むしろ自分自身のそれに基づかせて作っていると想定し、またそれ故にこれらの典拠は根拠がないものとして退けます。

3.　写本の問題。とにかく“聖別能力が消失した”と自ら主張するまさにその原文を確実性付きで絶えず特定する事がピエール・マリー神父に出来たとはとても信じられません。マロン派司教用儀式書（the Maronite Pontifical）に関する歴史の専門家はこう指摘しました：“残念ながら、より古い時代のマロン派司教儀式書に関する情報を提供し得る文書を私たちは持っていません。13 世紀に於いてようやく、信頼が出来て確実な幾つかの文書を私たちは発見し始めます。”[46]

後の典拠は、1296 年、1311 年、1495 年、そして 1683 年（再編-reconstruction）まで遡り、それらの歴史と相互関係は非常に複雑であります。

4.　反対証言。その上、マロン派司教儀式書の有名な初版（1215 年）に携わった 13 世紀のマロン派総主教、イルミヤ・アラムチティ（Irmia Alamchiti）の証言は、*既に* 司教である聖職者の中から総主教を選ぶという慣例が“比較的最近のこと”であるというピエール・マリー神父の主張を粉砕するように思われます。

総主教は自分が司教に聖別され、1209 年に総主教となる *前* の四年間は、大主教として（as a metropolitan）仕えたと自身の手で書いています。[47]　それとも、1209 年は依然として“比較的最近のこと”であると理解すべきなのでしょうか？

5.　シリア派典礼。マロン派典礼と関わりがあり、同じ起点に由来するシリア派典礼は、さらにピエール・マリー神父が言及し

46：ミカエル・ラッジ＜試訳＞（Michael Rajji）、ジョゼフ・メルヘイ＜試訳＞（Joseph Merhej）著、博士論、*マロン派司教儀式書史の道しるべ - Jalons pour l'Histoire du Pntificale Maronite -*（パリ、カトリック大学　1975 年）、13 に於ける引用。

47：メルヘイの著書内の引用：“マロン派の総主教であるマール・ブトロ＜試訳＞（Mar Boutros）は. . . その聖別された両手で私を叙階（聖別）し、大主教に昇格させ . . . 四年前 . . . 彼らは私がそれで選ばれた抽籤（ちゅうせん）を行なったのです。”

ているクレメントの祈り（the Prayer of Clement）を用いてもいるのです。しかし再度申し上げますが、この祈りは司教の聖別には使用されておらず、むしろ独占的に総主教の就任式の為に使用されます。

原文の言葉（シリア語）ですら、司教聖別の為の *秘蹟的* 儀式を、総主教聖別＜就任＞の為の *非秘蹟的* 儀式と区別する為に、二つの別個の言葉を使用しています。第一の儀式は、“按手（imposition of hands)”と呼ばれるのに対し、第二の儀式は“ある人に義務を委ねること、あるいは与えること”を意味する言葉で呼ばれています。[48]

シリア典礼学者はこう説明しています：“第一の場合［司教聖別］、聖別候補者は既に＜司祭叙階時から＞自分が持っているものとは異なるカリスマを受ける．．．第二の場合、総主教は自分が司教とされた時に受けたものと異なるカリスマを受けない。”[49]

6.　自己消滅的主張。その主張の最終項目に於いて、ピエール・マリー神父は同じマロン派の原文が、今日 二つの 目的に - マロン派典礼にある司教を総主教として就任させる為の *非秘蹟的* 祈りか、ラテン典礼にある司祭を司教に聖別するための *秘蹟的* 祈りのどちらかとして - 役立っていると仄めかしています。

このような祈りは *明瞭*（ 明確）であり得 *ないし*、それ故に、品級を授ける為の秘蹟形相として、それは無効と見做されなければならないと恐らくピエール・マリー神父は思わなかったのです（上：Ｉ.A.3,4 を御覧下さい)。

要するに、ピエール・マリー神父は、総主教を聖別する＜就任させる＞為にあるマロン派の祈りは秘蹟的なものであると証明する証拠を一つも提示してくれませんでした。従って、新しい司教聖別式の有効性の証拠としてそれに訴える事が彼には出来ません。

Ⅳ．　アルヴァロ・カルデロン神父

最初の論説で、ピエール・マリー神父は別の東方典礼の原文、つまりコプト派典礼の司教聖別の為の序唱を、第二バチカン後の＜司教聖別＞儀式の有効性の証拠として挙げました。“確実に無効である”の中で、パウロ六世が本質的な秘蹟形相に指定した文は、実際のコプト派の形相と同じで *ない* と私は指摘しています。私の論説に対するカルデロン神父の異論は取り分けこの問題に焦点をあてているのです。

48：クリス・サルキス（G. Khouris-Sarkis）著、“シリア教会に於ける司教聖別：概論（Le Sacre des Éveques dans l'Église Syrienne: Introduction）”、*東方シリア 8-L'Orient Syrien 8* -（1963 年)、140-141、156-157。“しかし司教儀式書は ... 司教たちに授けられる聖別と、総主教に授けられるそれの区別をしており... その為に司教儀式書は、この聖別を‘syom'ìdo d-Episqûfé ’、つまり司教たちへの按手と呼んでいる。この言葉は、総主教の為の儀式という称号で使われており、“‘Mettasºrhonûto’とは、ある人に任務を委ねる、つまり彼にそれを授ける行為である。”

49：クリス・サルキス、140-141。“第一の場合、選ばれた者は、既に自分が持っているものとは異なるカリスマを受ける。第二の場合、総主教は自分が司教とされた時に受けたものと異なるカリスマを受けない。”

A.　コプト派の形相対パウロ六世の形相。

1.　誤った比較？　私の行ったコプト派の序唱全体とパウロ六世の＜聖別＞儀式内の“形相的 - 有効な（formal-effective）”文と彼が呼ぶものとの比較は、誤っており不当だとカルデロン神父は主張しています。

比較が正当である為には、a)コプト派の序唱内の“形相的 - 有効な”文を特定し、それをパウロ六世によって指定された“形相的 - 有効な”文と同一視するか、あるいは b)コプト派の序唱全体を、“形相的 - 有効な”文を取り巻いているパウロ六世の聖別の祈り＜聖別祈祷＞全体とを比較するかのどちらかが必要となるでしょう。[50]

回答：

- コプト派典礼について：1898 年のコプト司教会議（The Coptic Synod of 1898）は、司教聖別の為の形相を特定しました：“この形相は、叙階司教（聖別を行なう司教）が司教受任候補者（司教に聖別される候補者）に按手する間に唱える実際の祈り”[51]であって、教皇レオ十三世はこの司教会議の制定（acts）を承認しています。[52]

＜ですから＞レオ十三世が“形相的 - 有効な（formal-effective）”文として承認したもの以外に見る必要はなどどうみてもありません。

- 新しい儀式＜司教聖別式＞について：パウロ六世自身、この儀式＜司教聖別＞の本質に属する“形相的 - 有効な”言葉を特定しました。[53]

このような言葉は、必要とされるもの *全て* を必然的に含んでおりますので - つまり、当然（by definition）これらの言葉は不可欠であるのみならず十分でもある事から - 、ここでも、同様に、比較を行なうに先立って、パウロ六世による聖別の祈り＜聖別祈祷＞全体に目を通す必要などどうみてもないのです。[54]

2：省略された統計？　カルデロン神父は、コプト派の序唱にある 340 語の大多数が新しい聖別の祈りの残りの部分に見出される事をこの私が指摘していないと主張します。[55]

カルデロン神父は単に誤解しているだ

---

[50]：“Validié（有効性）”、213－214；“Validity . . . Replies（有効性 . . . 諸回答 - 試訳）”、42-43。

[51]：引用されているフェリックス．カッペッロ（F. Capello）著、*De Sacramentis*（ローマ、マリエッティ 1951 年）4：732．“In collation trium ordinum majorum . . . forma est ipsa oratio quam ordinans recitat, dum manus ordinando imponit.”

[52]：Epistola *Synodales Vestrae Litterae*, 1899 年 4 月 25 日、*Leonis XIII P.M. Acta 18 - 教皇レオ十三世、公文書 18* -（1899 年）、43-44。

[53]：*ローマ教皇の認可（Pontidicalis romani recognitio）*, 372, 373: “quaenam in ritu ad naturam rei pertinere dicenda sunt,”“ad naturam rei pertinent, atque adeo ut actus valeat exiguntur.”

[54]：その上、新しい儀式の典礼法規は、“共同聖別をする” - 従って理論上この秘蹟を同様に授ける - 司教たちが、*本質的な* 形相を唱えるどころか、聖別の祈り＜聖別祈祷＞全部をただ唱えるだけと規定している。パウロ六世著、司教、司祭及び助祭の叙階について（*De Ordinatione Episcopi, Presbyterorum et Diaconorum*）, ed. typ. Alt.（ローマ：ポリグロ - Polyglot - 1990 年）、16,25 番。

[55]：“Validié”、214；“Validity . . . Replies”、43。

けです。私は “＜司教聖別の＞新しい＜秘蹟＞形相を取り巻いているパウロ六世の序唱はコプト派の形相に見出される多くの表現を含んでいます”[56]とはっきり申し上げました。

3.承認と誤解。カルデロン神父は次の主張をしています：“（新しい聖別式に於いて形相的 - 有効な表現と見做される表現に相当する）コプト派儀式の恐らく‘形相的 - 有効な’表現は、新しい聖別式のそれより短いものであり、その結果、それが、仮により長くない場合、等しく曖昧なものです。”[57]

この論説のもっと後のところで、カルデロン神父は “諸序唱の形相である言葉は、聖伝のローマ典礼儀式（Roman rite）においてすら、一般的に、やや曖昧で漠然としており”、“ローマ当局（Romans）は、当儀式文の曖昧さに気付いている”[58]と主張しているのです。

二つの事柄が、上述の主張について仰天させてくれます：

● カルデロン神父は、新しい本質的な秘蹟形相が“曖昧”であるとはっきり主張しています。つまりこの主張は、新しい形相が、ピオ十二世の要求したものとは違う、不*明瞭な* - つまり曖昧な - 形相だと認めているのです＜二重否定表現の簡略化の為の意訳＞。

● しかしそうする事でカルデロン神父は、上のように神学的に四角い丸に相当するもの（the theological equivalent of a square circle - 実際に存在し得ないもの）を肯定的に仮定しました。どの秘蹟形相も、定義上“曖昧”であり得ないのは、仮にそれが曖昧であり得た場合に、それは＜事柄を＞ *意味* しなくなるからです。

B. 新しい形相の文脈

カルデロン神父は、新しい形相の有効性を保証する為に、この形相の文脈に注目させました。彼は言います：
“この文脈は序唱だけに縮小され得ないことから非常に広いものであり、全儀式が考慮されるべきです。”

聖別と犠牲＜いけにえ＞に関する *あらゆる* 考えを英国国教会の叙階式から取り除く事に関するレオ十三世の言及からの引用文に基づき、カルデロン神父は次の原理を推定しています：もしこの儀式＜聖別式＞の残りの部分に“聖別と犠牲が関係している（were involved）”ならば、この儀式は“一貫性（consistency）”を持つだろう。[59]

56：“確実に無効である（Absolutely Null）”、5。

57：“Validié”、214；“Validity . . . Replies”、43。

58：“Validié”、215；“Validity . . . Replies”、44。

59：“Validié”、215：“もし仮にこの儀式の残りの部分に於いて聖別と犠牲が話題にされる＜言及される＞なら . . . .（si dans le reste du rite il était question de consécration et sacrifice....”；“Validity . . . Replies”、44。

回答：

- カルデロン神父は - これらの不明瞭な言葉が何を意味していようとも - “一貫性”をもたらす“関係”に関する御自身の原理を立証する為に*何一つ* 典拠を引用 していません。

- しかしながら、カルデロン神父は文脈から自ら議論を *組み立て* 得る核心に辿り着きさえしなかったのです。彼は、諸品級（Holy Orders）の為の＜助祭、司祭、及び司教の権能を授ける司教聖別の為の＞秘蹟形相にピオ十二世が要求した両要素：つまり品級の権能と聖霊の恩寵をこの新しい形相が - *曖昧に* でも - 含んでいる事を論証しませんでした。

新しい形相が“間違いなく有効な東方典礼に於いて使用されている”事を立証する事に於けるピエール・マリー神父とカルデロン神父の無力は、私たちを一直線に *統治する霊（Spiritus principalis）* という言葉へと連れ戻してくれます。それは実際に何を意味するのでしょうか？

アンスガール修道士は、何らかの認識可能な聖伝カトリック神学原理に基礎を置いた回答を組み立てる事が出来ませんでした。またピエール・マリー神父とカルデロン神父は、そうしようとさえしなかったのです。

しかしこの問いに対する回答は、“確実に無効である”の中で私が論証した様に、*統治する霊* は、実際に何一つ正確な意味を*持たない* というものなのです。それは少なくとも 十二の 異なる事柄の一つを意味する事は出来ます。

それらの中には聖霊があって、これは新しい形相の文脈で恐らく意味しているものなのです。実際、それを巡る議論が起きる前、新しい儀式＜新しい司教聖別式＞の主要な作者であったドン・ボットは、*統治する霊* を含む一節を、単に“聖霊に対する祈願（the invocation of the Holy Ghost）”[60]と呼んだだけでした。

しかしこの表現に対する多くの意味の中に、私たちは品級の権能（potestas Ordinis）を見出しません。この *統治する霊* は、如何なる意味に於いても品級の秘蹟を *曖昧にさえ* 表しておらず、まして司教職（the Episcopal Order）を構成する司祭職の充満という意味に於いてそれ＜品級の秘蹟＞を表していないのです。

これ無しでは、ピオ十二世の規定された二つの必須要素の一つは欠けますので、パウロ六世の聖別式にある本質的な秘蹟形相は明らかに無効なのです。“文脈”は、それがどれほど“広”かろうとも、全く存在し

60：“司教の叙階＜聖別＞”、*ラ・メゾン・ディュー（La Maison-Dieu）* 97（1969年）。122、123。“聖霊に対する祈願”；“儀式文の一部、つまり聖霊に対する祈願を含んでいる部分を、不可欠な部分として指定した（on a désigné une partie de la formule, celle qui contient l’invocation à l’Esprit Saint, comme partie essentielle.）。

てもいない言葉を“明細に述べる”事など出来ません。

この問題をもう一度要約すれば：新しい司教聖別式の有効性に関する議論は、聖別式の本質的な**秘蹟形相**＜聖別式に**欠かせない秘蹟形相**＞ - つまり秘蹟儀式の中で秘蹟の効果を生じさせるのに必要かつ十分な言葉 - に集中するという事になります。

司教聖別の新しい儀式に於いて、この形相は *品級の権能（the power of Order）*を明瞭に表現していません。秘蹟倫理神学の一般原則（the general principles of sacramental moral theology）に拠れば、それは上のように、諸品級の為の形相（a form for Holy Orders）中に要求される要素の一つ＜品級の権能＞を欠いており、それ故に無効です - つまり司教職を授ける事が出来ないのです。

従って、この新しい儀式によって聖別された司教たちは、真の司教たちの有する秘蹟的権能を欠いており、さらにこの様な司教たちにより叙階される司祭たちは、真の司祭たちが有する秘蹟的権能を欠いている事から、司祭の特質（sacerdotal character）に懸かっている、彼らの授ける秘蹟は無効であり、彼らのミサに与る信徒たちは単にパンを礼拝し拝領するだけなのです。

単に . . . パンを . . . 。

2007 年 1 月 9 日